

# 優秀演題抄録

## 11 食事をきっかけに主体的な生活へ 意味のある作業への介入を通して

【演 者】 渡邊 夏海 【所 属】 会田記念リハビリテーション病院

【共同演者】 鈴木 充紘（作業療法士）

【キーワード】 意味のある作業、語り、主体性

### 【はじめに】

生き生きとした人生を送るためには、その人にとって意味のある作業の継続が大切と言われている。今回、臥床傾向であった症例に対して、事例にとって日課であり楽しみであった食事をきっかけに、事例の主体性を引き出し、活動的な独居生活を再開することができたため報告する。尚、本報告は本人の同意を得たものである。

### 【症例紹介・初期評価】

80歳代後半女性。腰椎圧迫骨折受傷し当院入院。筋力・耐久性の低下や、認知機能低下(長谷川式簡易知能評価スケール：15/30点)あり。歩行器にて入浴以外のADL見守り～一部介助。病前は健康に気を遣い、食事のこだわりが強く毎日ヒレ肉を食べるのが楽しみであった。1年前に息子を亡くして以来独居で、甥夫婦が月2回家事援助の為訪問していた。

### 【経過】

入院時は発動性や耐久性の低下により臥床傾向で、また認知機能低下から柵外しや独歩で歩き出す場面が認められていた。その為、歩行でのADL訓練やベッド周囲の環境調整と並行して、ナラティブな視点をを用いた作業療法を展開した。会話の中では「息子の元へ早く逝ってしまいたい。」と悲観的な発言がある一方、「いつも〇〇駅までヒレ肉を買いに行っていたんだよ。食べれなかったら生きててもしょうがない。」と食の話題になると熱心に語る場面も見られていた。そこで、事例にとって日課であり楽しみであった「ヒレ肉を食べる」という経験が、意志や行動を変化させるきっかけとなることを期待し調理訓練を実施。「やっぱりこのヒレ肉はおいしいね。久々に料理した。」と笑顔で調理を行う姿がみられ、日中は依然として臥床傾向ではあるものの食事の時間になると自ら食堂へ行ったりトイレに向かう姿がみられるようになった。更に事例にとって意味のある作業を明らかにするため認知症高齢者の絵カード評価法を実施。事例にとって重要な作業はADL、家事、園芸や散歩といった趣味、健康管理、息子の仏壇にお参りをするといった活動であることを把握し、調理訓練に加え上記の作業を実施。その後、予定表を見てリハビリや入浴の時間を確認し、準備をして待っている様子がみられるようになった。また、退院に向け外泊訓練実施した際には実際に買い物に行きヒレ肉を買って調理を行った。

### 【結果】

自宅にてADLが自立し、甥夫婦や近所の方からの家事援助や介護保険サービスを利用しながら独居再開となった。受傷前同様に家事をこなし、食事を楽しみ、仏壇へのお参りを大切にしながら活動的な生活を送っている。

### 【考察】

今回、発動性の低下した事例に対し、日課であり楽しみであった作業をきっかけに、意志や行動を変化させることができた。事例のナラティブや認知症高齢者の絵カード評価法から意味のある作業を見出し、提供したことで事例の主体性を引き出し、時期に応じて独居に必要な作業を提供できたことが独居再開を可能にし、活動的な生活に繋がったと考える。